



## ポストドクター問題

国立教育政策研究所・日本物理学会キャリア支援センター 編

世界思想社 2,300円+税 432頁

読み物  
お薦め度  
3  
☆☆☆★★

理系分野のポストドクター問題を取り上げた一冊を読んだ。「ポストドク問題」とは、大学や研究機関での常勤職や一般の企業等での一定の職ではなく、(主に短期の)任期付きの研究職に就いている若手研究者の数が増加し続けていることを指す。この本は、書籍というよりは、国立教育政策研究所と日本物理学会が平成18年度より行った大規模な調査の報告書を再編した形をとっている。もともとが報告書であるため、研究社会やポストドクと無縁な人にとっては楽しく読み進むものではない。また、個人的には、「これから研究を始めようと希望に胸を膨らませている大学院生が読んで現実を知って欲しい」と思うものでもない。しかし、膨大な調査データとその多角的な解析に基づいており、関係者、すなわち大学・研究所の研究者にとっては一読に値する。

本書の前半では素粒子・原子核専攻のポストドク48名に対するインタビューの結果を報告し、その後は日本物理学会がインターネットを通して行ったアンケートの結果を、グラフを多用して解説している。インタビューでは各人の発言をいくつも列記する部分が多く、ポストドクの熱い思いが伝わってくる。インタビューを通して浮き彫りになるのは、現役のポストドクが感じる「憧れと現実との乖離」であり、そしてその差を埋めるべく努力を重ね続ける自分自身へのいらだち、そして将来への不安である。折しも昨年には、素粒子物理理論の功績で日本人研究者にノーベル賞が授与されており、基礎科学の研究を続ける夢とロマンの一つとして描かれている。

本書の特色は、後半の1節で、ポストドク問題と抑うつ傾向を真正面からとらえている点である。Zung式日本版SDS得点という指標を用いて抑うつ傾向を定量化し、その結果を解析している。このSDS得点をさらに専攻別や、査読付き論文数

などとの相関をとり、細かな考察を加えている。これまであまりあらわには関連づけず、定量的な議論をすることもなかった「心理状態の調査」を真正面から行ったといえよう。あとがきにもこの経緯や、掲載することへの戸惑いについて書かれている。

後半では、アンケート結果の一つとして、ポストドクが求める支援策を具体的に示したり、就職へ向けた方向性をいくつか示す。しかし、あくまでもポストドク問題の現状と課題、展望を明らかにするというスタンスをとっており、何か具体的な提案をしてポストドクや関係者に実行を強く促すような書き方はしていない。

高学歴の人材を活用できないのは社会にとっても不利益である、とはポストドク問題を社会問題の一つとしてとらえた見方である。しかし、研究者社会にいる私自身は、これを社会問題の一つとしてとらえる(あるいはとらえてくださいと唱える)ことには若干の違和感をもつ。社会問題としての解決と研究者自身の納得が必ずしも一致するようには思えないからである。個々の若手研究者にとっては、どのような形にせよ、やがてポストドク問題におとずれるのは解決ではなく「決着」ではないだろうか。個々の研究者にとっては、自身が納得する決着がついて初めてこの問題は問題ではなくなる。それは、研究職以外のキャリアを素晴らしいと思うことや、あるいは自分は研鑽を重ねてきて、さまざまな形で(研究)社会に貢献したという納得であるかもしれない。本書の最後の章では和田昭允氏ら著名人からの寄稿が掲載されており、そこでは若手研究者への励ましとメッセージが語られている。

吉田直紀(東京大学数物連携宇宙研究機構)